低地リトアニア方言のアクセント法について[0)]

柳　沢　民　雄

0.

リトアニア語は，高地リトアニア方言 (aukštaičiai；High Lithuanian) と低地リトアニア方言 (žemaičiai；Low Lithuanian) の二大方言に大きく分けることができる。Zinkevičius (1966) によれば，高地リトアニア方言は，さらに西部方言，東部方言および南部方言に下位区分され，一方，低地リトアニア方言は，西部方言，北部方言および南部方言に下位区分される（地図1を参照）[1)]。この低地リトアニア語の三つの方言は，伝統的な呼称である donininkai 方言，dounininkai 方言，dūnininkai 方言にそれぞれ対応する。この三方言の区分は，標準リトアニア語の二重母音 ie（<*ei），uo（<*ō）が，donininkai 方言で ė，o（文字の右上の点は長音を表す），dounininkai 方言で ęi，ǫu，dūnininkai 方言で i，u と発音されることによっている。この内，dounininkai 方言は，さらにクレチンガ方言 (kretingiškiai) と呼ばれる西部方言とテルシャイ方言 (telšiškiai) と呼ばれる東部方言に下位区分できる[2)]。本稿ではこのクレチンガ方言の資料を基にして，この方言の名詞のアクセント法を分析するものである。このクレチンガ方言は，低地リトアニア方言の韻律特徴を最もよく表しているといわれる[3)]。すなわち，語の第一音節へのアクセントの固定傾向，各音節における音調の存在，および音調の種類の豊富さである。本稿では，資料として Лаучюте による資料を用いて，二音節語の名詞のアクセント法を中心に分析した。

1.

高地リトアニア語の西部方言の南部下位方言を基礎にして形成された現代標準リトアニア語（以下 SL と略す）は，自由アクセントを有し，アクセントのある長音節と二重母音（あるいは二重母音的結合）には acute (tvirtapradė priegaidė：記号 ´) と circumflex (tvirtagalė priegaidė：記号 ~) の2つの音調をもっている。標準語の acute の特徴は次のようである：その音調を有する母音のトーンは始め突然に上昇し，若干その高さを保ってから（ある場合には頂点に達してからすぐに）下降する。トーンが頂点に到達するのは，ほぼ母音の中心か，その前半の近くである。二重母音の場合は，始めトーンは上昇し，それからその高さを保ってからゆっくりと下降する。トーンは二重母音の第一部分で頂点に達する。また二重母音の末尾では，トーンは普通始めにおけるよりも低い。一方，標準語の circumflex の特徴は次のようである：

トーンは始めゆっくりと上昇し，そののち若干その高さを保ってからかなり急激に下降する。トーンが頂点に到達するのは後半（二重母音の場合は，二重母音の第二部分）である[4]。従って，音声的にこの二つの音調は，それぞれ下降的音調と上昇的音調として実現するが，リトアニア語はモーラを数える言語であるので，音韻論的観点からすれば，acute は 2 モーラ音節の最初のモーラにアクセントがあり，circumflex は 2 モーラ音節の後ろのモーラにアクセントがあると考えることができる。この 2 つの音調は，任意のアクセント長音節に現れることができ，それは音韻的対立を成している（sū́ris《チーズ》：sū̃ris《塩分》，gìnti《守る》：giñti《追って行く》，áušti《冷める》：aũšti《夜が明ける》）。一方，アクセントを有する短音節には，短音調（trumpinė priegaidė）があり，それは上昇し下降するという音声的特徴をもっている[5]。しかし短音調は短音節にしか現れないので，短音節には音韻的な音調はない。アクセントが短音節にある場合には，grave（記号 ˋ ）で表される（例えば，rankà《腕》）。また非アクセント音節には音韻的な音調はない。さらに標準リトアニア語は，以下の韻律的対立をもつ：1）アクセント位置による対立：gálvos《頭，Nom.pl.》：galvõs《頭，Gen.sg.》，2）量の対立：trỹs《3，Nom.》：trìs《3, Acc.》，3）質の対立，すなわち音調の対立：áukštas《高い》：aũkštas《階》。

共時的な観点からすると，標準リトアニア語の名詞のアクセント法は，4 つのアクセントパラダイム（以下 AP と略す）をもち，アクセントパラダイム 1（以下 AP.1 と略す）は語幹固定アクセントパラダイムであり，その他のアクセントパラダイム 2，3，4（以下それぞれAP.2, AP.3, AP.4 と略す）は，アクセントが語幹と語尾の間を移動する移動アクセントパラダイムである。単音節語幹の名詞の場合，各アクセントパラダイムと語幹の音調は以下のように対応する：AP.1 と AP.3 は acute を，AP.2 と AP.4 は circumflex あるいは短アクセント（grave）を特徴とする。一方，多音節語幹の名詞の場合，その語幹の末尾音節が circumflex あるいは短アクセント（grave）であるとき，その名詞は AP.2 に属する（kalnẽlis《小山》，degtũkas《マッチ》）。一方，語幹の末尾音節が acute か，または語幹の末尾音節以外の語幹音節にアクセントがある固定アクセントパラダイムの名詞は，AP.1 に属する（pakrántė《岸辺》，ãšara《涙》，jáutiena《牛肉》）。アクセントが語幹にある場合，語頭音節にアクセントをもつ移動アクセントパラダイムの名詞は，AP.3 に属する（dõbilas《クローバー》，kãtilas《釜》）。AP.4 をもつ多音節語幹の語はない。一例として，ā-語幹女性名詞の単音節語幹のアクセントパラダイムは以下である：

	AP.1 《菩提樹》	AP.2 《腕》	AP.3 《頭》	AP.4 《冬》
Sg.				
Nom.	líepa	*rankà*	galvà	žiemà

Gen.	líepos	rañkos	galvõs	žiemõs
Dat.	líepai	rañkai	gálvai	žiẽmai
Acc.	líepą	rañką	gálvą	žiẽmą
Inst.	líepa	*rankã*	gálva	*žiemã*
Loc.	líepoje	rañkoje	galvojẽ	žiemojẽ
Pl.				
Nom.	líepos	rañkos	gálvos	žiẽmos
Gen.	líepų	rañkų	galvų̃	žiemų̃
Dat.	líepoms	rañkoms	galvõms	žiemõms
Acc.	líepas	*rankãs*	gálvas	*žiemãs*
Inst.	líepomis	rañkomis	galvomìs	žiemomìs
Loc.	líepose	rañkose	galvosẽ	žiemosẽ

上の例からわかるように，AP.1 と AP.2 のアクセントの位置に関して，AP.2 のイタリック体の格形だけがアクセントを語末の位置にもち，AP.1 のアクセント位置と異なっている。一方，AP.3 と AP.4 のアクセントの位置に関しては，AP.4 のイタリック体の格形のみが AP.3 と異なり，アクセントを語末の位置にもっている。通時的観点からすれば，イタリック体の格形は，所謂ソシュールの法則がリトアニア語の歴史以前の時代に働き，アクセントが語末へ推移したものである[6]。ソシュールの法則とは，本来的にアクセント的であった circumflex あるいは grave をもつ音節の直後に acute のある音節が続くとき，アクセントは後ろの acute をもつ音節に推移した：*r¹añkā́>*rañk¹ā́>rankã (Nom.sg.)。それに対して，アクセント音節に後続する音節が acute でない場合には，ソシュールの法則は働かない：*r¹añkõs>rañkos (Gen. sg.)。従って，このパラダイムの中でソシュールの法則が働く格形は，本来的に acute が期待される語尾である。この acute の起源は，後に述べるように印欧祖語の喉音 (laryngeal H) の存在と関係づけられている。このこのとは，このパラダイムのソシュールの法則の働いた格形の語尾には，いづれも laryngeal の存在が仮定できることから確認できる。例えば，Nom.sg.の語尾：-ā<*-ā́<*-aH，Inst.sg.の語尾：*-ā<*-ą̄<*-ā́n<*-aH-n[7]，Acc.pl.の語尾：-ãs<*-ā́s<*-aH-(n)s[8]。一方，他の格形においてはlaryngealは母音間で消失し，acuteは生じていない。例えば，Gen.sg.の語尾：-os<*-ās<*-aH-ĕs/ŏs，Dat.sg.の語尾：-ai<*-āi<*-aH-ei，Nom.Pl.の語尾：-os<*-ās<*-aH-es，Gen.pl.の語尾：-ų<*-un<*-oun<*-ōn<*-aH-om。また，laryngealが期待されるAcc.sg.の語尾-ą(<*-aH-m) が，リトアニア語でacuteにならないのは，おそらく語末の鼻音-mの前でlaryngealが失われたためであろう[9]。これにはまた，Acc.sg.形の語尾にacuteを生じない他の母音語幹名詞 (cf. *o-語幹：-ą<*-an<*-ŏ-n/m，*u-語幹：-ų<*-un<*-u-n/m，*i-語幹：-į<*-in<*-i-n/m) の類推によって，*ā-語幹名

詞も acute でないという仮説もある[10]。その他の格形については，第4章で考察する。なお，Nom.sg., Inst.sg., Acc.pl. 形における語末の長母音の短縮はレスキーンの法則による[11]。その法則によれば，多音節語の語末の acute 的長音節はアクセントの有無の如何にかかわりなく短縮されたが，語末の circumflex 的長音節はアクセントの有無にかかわりなくその長音性を保持した：*rˈañkąˀ>rankã (Inst.sg.)；*rˈañkañ>*rˈañkąˀ>rañką (Acc.sg.)。従って，AP.2 と AP.4 は，リトアニア語の語幹固定アクセントパラダイム (AP.1) と移動アクセントパラダイム (AP.3) に，それぞれソシュールの法則が働いた二次的なアクセントパラダイムと見なすことができ，AP.1 と AP.2 および AP.3 と AP.4 は相補分布を成している。それ故，リトアニア祖語時代には，AP.1 を基本とする語幹固定アクセントパラダイム (Barytone AP) と AP.3 を基本とする移動アクセントパラダイム (Mobile AP) の二つのアクセントパラダイムを仮定することができる。

2.

低地リトアニア方言（以下 LL と略す）のアクセント体系は，標準リトアニア語と非常に異なっている。標準リトアニア語の語形が語尾アクセントを持つような場合，低地リトアニア方言において，ある語形を除いて，アクセントは一般に第一音節に主要アクセントをもち，語尾あるいは中間音節に副次アクセントをもつとされる（例：SL šakã：LL šãkã)。特にここで検討されるクレチンガ方言においては，「アクセントは，語頭と語末の間に分割されている。...声圧の点から，その2つのアクセントは同じではない：後退アクセント（筆者注：語尾より先行音節に移動したアクセント）は，副次アクセントと呼ばれる古いアクセント（筆者注：語尾アクセント）より強い。K.Būga は，自分の辞書の序文 (Lietuvių kalbos žodynas, I, 1924) の中で，低地リトアニア人は新しい後退アクセント以外に，まだ古い語尾アクセントも発音しており，それでもそれは新しいアクセント（筆者注：語頭アクセント）より弱い，ということを強調している」(Aleksandravičius：98)。しかし，Zinkevičius によれば，Akmenė, Klykoliai, Vegeriai 近隣の低地リトアニア語の北部方言（テルシャイ下位方言 telšiškiai）地域，また西部方言内の Klaipeda 近郊地域でも，クレチンガ方言にあるような語尾アクセントは聞かれないという[12]。一方，クレチンガ方言において3音節以上の語においても，声圧は語頭音節のアクセントが一番強く，中間音節のアクセント，語尾音節のアクセントの順に弱くなるという（例：SL šilumã：LL šęlǫmã；SL velėnijã：LL vėlīenėjė̃)[13]。従って，クレチンガ方言のアクセントの特徴は，語の音節の量によらず殆どあらゆる音節にアクセント付けられ，語の第一音節のアクセントは語アクセントの頂点を成している。このことはまた以下の事実からも窺える。この方言においては，二重母音の音調の声圧の位置は標準語とは異なり，circumflex も acute のように二重母音の第一要素に集中し，延長化されている：SL dúona：LL dǫ̃una；SL raňkos：LL rǫ̃nkas。

低地リトアニア方言は，その音調の音声的実現において標準語と非常に異なっている。Aleksandravičius (1957)[14]によれば，クレチンガ方言において5つの音調が存在するという：短音調（trumpinė prigaidė：記号 ˋ），circumflex（tvirtagalė priegaidė：記号 ˜），中断音調(lauž-tinė priegaidė，broken intonation：記号 ˆ），中間音調（vidurinė priegaidė，middle tone：記号 ˢ），下降音調（tvirtapradė priegaidė：記号 ´）。さらに同じクレチンガ方言を扱っている Лауцюте (1979)[15]は，短音調を除いてて5つの音調を区別している。それによれば，circumflex 音調を，さらに第一引き伸ばし音調（pirminė tęstinė priegaidė：記号 ˜）と第二引き伸ばし音調（antrinė tęstinė priegaidė：記号 ˆ）に分けている。また，acute として，中断音調と突き音調（stumtinė priegaidė）に分けているが，この突き音調は上の Aleksandravičius のいう下降音調と同じ音調である。クレチンガ方言の音調の各特徴は，以下のようである。短音調は，短母音 a，e，ę，ę，i，o，u からなる短音節に現れ，声圧は短くて中間の強さである。一般に，短音節には音調はないといわれるが，しかし Grinaveckis (1973)[16]によれば，短音節にも声の特別な動きが存在し，短音調はトーンの特別な高さの抑揚を特徴とし，そのトーンの高さの観点から短音調は上昇し下降する性質の音調であるという。しかし，この音声的観察にもかかわらず，短音調は短音節にのみ現れ，短音調以外の音調は長音節にのみ現れることを考慮するならば，音韻論的観点から短音調を音調と見なす必要がない。それ故，以下では短音調を短アクセント（あるいは grave：記号 ˋ）と言い換えることにする。次に，この方言の circumflex（あるいは引き伸ばし音調）は，Grinaveckis (1973)[17]によれば，長母音と二重母音，および二重母音的結合(単純母音＋ソナント)を含む長音節に現れ，引き伸ばされた長い声圧を伴って発音される。この音調を発音する際には，声の強さとトーンの高さは最初わずかしか上昇せず，終わりに幾分下降する。この音調を有する二重母音的結合における声圧は，その第一要素に集中させられ，その要素は長いという，例えば，LL lāuks（cf. SL laũkas)。標準語（および高地方言)の circumflex とクレチンガ方言のこの音調との違いは，この方言のほうが声の強さとトーンの高さがわずかしか上昇せず，声圧が集中されないことである。他方，標準語は，声の強さとトーンの高さはかなり上昇し，声圧は終わりに集中される。このような低地リトアニア語の circumflex の特徴は，音の始めから終わりにかけて声の一様な強さを有するラトヴィア語の引き伸ばし音調（Dehnton）と関係している。すなわちこの低地リトアニア方言は，高地リトアニア方言地域とラトヴィア語地域との間に地理的に位置するだけでなく，音声的特徴に関してもその中間を示す方言である。次に，第二引き伸ばし音調は，Grinaveckis(1973)[18]によれば,「声の強さの動きとトーンの変化の点からすると，標準語の上昇音調により類似している。その音調の声は上昇して下降する。二重母音的結合における声圧は，第一成分の終わりに集中されるか，あるいは第一成分の終わりと第二成分の始めに集中される」，という。この低地リトアニア方言における第二引き伸ばし音調は，ただ短音節からの「後退アクセント（atitrauktinis kirtis)」（4章を参照）を有する語の語末から第二番目の長音節にのみ見られる音調であ

る，例えば，LL dȧrbinĩnkũs ‹Acc.pl.› (cf. SL darbininkũs ‹AP.2›)。このような後退アクセントが見られない場合には，第一引き伸ばし音調が現れる：LL darbinĩnka (cf. SL darbiniñko ‹Gen.sg›)[19]。すなわち共時的観点からすれば，語尾に短アクセントがある場合には第二引き伸ばし音調（ˆ）を，語尾に中断音調かあるいは語尾がアクセントを持たない場合には，第一引き伸ばし音調（˜）を語尾前の長音節はもつといえる(例えば，LL darbinĩnkǫ̣u ‹Dat.sg.›：SL darbiniñkui)。従って，音韻論的にはこの二つの音調は相補分布を成しており，第二引き伸ばし音調は第一引き伸ばし音調の位置的なヴァリアントであると見なすことができる。Aleksandravičius (1957) のクレチンガ方言の記述には第二引き伸ばし音調については述べられていないが，Лаучюте (1979) の記述には circumflex（˜）の位置的ヴァリアントとして述べられている。しかしここでは第二引き伸ばし音調は，語尾に短音節がある場合に見られるのではなく，語尾に circumflex を有する長音節がある場合に見られる，例えば，LL lẹ̃ntã：SL lentã ‹Nom.sg.›；LL lẹ̃ntũos：SL lentõs ‹Gen.sg.›。これは他の音調との関係やアクセントパラダイムとの関係から考察しなければならない。一般的に，語尾音節が長い場合，後退アクセントを有する語の語末から第二番目の長音節には，低地リトアニア方言において中間音調（ˢ）が見られるという[20]，例えば，LL lȧ̊ukã：SL laukaĩ ‹AP.4›)。しかし Лаучюте の記述では，前述のごとくこの場所には第二引き伸ばし音調がみえる。Лаучюте が中間音調を用いる場所は，無アクセント短語尾を有する語の語末から第二番目の短音節においてである[21]，例えば，LL rǫ̣̊gi：SL rũgį ‹Acc.sg. AP.4› (cf. LL rǫ̣g.'ǫ̣：SL rugiũ ‹Inst.sg.›)。従って，ここでは中間音調は，無アクセント語尾の前での短アクセントの延長ヴァリアントとみなされる。中間音調と第二引き伸ばし音調の語における出現条件は，リトアニア方言学において様々な議論を引き起こした問題であるが，後述するようにこの二つの音調は音声的に類似しており，語幹の短音節の延長ヴァリアントとしての中間音調を除けば，どちらも後退アクセントをもつ語の，語末から第二番目の二重母音を有する長音節に現れている。従って，circumflex のヴァリアントとしてのこれら二つの音調は，各々の下位方言内での体系の下に記述されねばならない。中間音調（ˢ）は，前述したように第二引き伸ばし音調に類似した音調である。Grinaveckis[22]によれば，その声の強さとトーンの動きは上昇し下降する。声圧は発音の終わりにより集中され，二重母音的結合においてそれは第一成分の終わりにあるか，あるいは第一成分の終わりと第二成分の始めにある。また低地リトアニア方言において，後退アクセントを持つ語（以下のｃの場合は除く）の音節に，以下の条件のとき中間音調は見られるという：ａ）語尾音節が長いとき，終わりから二番目の長音節において：LL grȧ̊dã：SL grūdaĩ；ｂ）語末から第三番目とそれ以上離れた長音節において，LL mȧ̊rškẹ̃nẽ：SL marškiniaĩ；ｃ）延長化した ẹ, ọ (<i, u) があるとき，「昔の主要アクセント」（筆者注：本来的なアクセント）によってアクセント付けられた音節において：LL bǫ̣̊.va：SL bũvo。Grinaveckis によって述べられる第二引き伸ばし音調と中間音調の二つの音調の現れる環境を考慮すれば，その二つの音調の出現はあらかじめ予

期され，それらは相補分布を成していることが分かる。すなわち，後退アクセントを有する語において，語尾に短アクセントを有する音節の直前の長音節には第二引き伸ばし音調が現れ，一方，長音節語尾（この場合にはかならず circumflex をもつ）の直前の長音節と語末から三音節以上離れた長音節には中間音調が現れる。従って，音韻論的観点からは，第二引き伸ばし音調も中間音調も circumflex のヴァリアントと見なすことができる。中断音調（ˆ）は，Grinaveckis[23]によれば，以下のような音調である。「中断音調の声の動きはよく聞こえる。この音調を有する音を発音するさいに，トーンと声の強さは始めかなり突然に高まる。その強さの頂点に達すると，突然一瞬にして中断し（あるいは非常に弱まり），そしてその後，音はより低い下降する声でおわる。低地リトアニア方言の西部地域では裂け目はより強く，東部地域ではより小さくしか感じられない。発音の中心での声の中断は，声門の突然の閉鎖によって説明される。しかし常に声が完全に中断されるとは限らず，しばしばただ静かになったり弱まるだけである，特に音 i，ie；u（：SL y，ie，ė；ū，uo）をこの音調で発音するさいに声の中断はそのようであり，ただ弱化だけが聞こえる，例えば，vîna（SL vìena̧），tîeva（SL tė̃va̧），lûpa（SL lū̃pa）。...中断音調の最初の上昇する部分は，後の下降する部分よりかなり短い（おおよそ三分の一ぐらい）ように思える。...中断音調の声圧は，上昇する部分の終わりに集中される。声圧そのものは短くて強い，それは他の音調の声圧より強く，また高地リトアニア語の西部方言の下降音調の声圧よりも強い。二重母音においてそれは常に第一要素の上にあり，その第一要素は中断音調で発音されるとき常に長い」。このような低地リトアニア方言における中断音調は，標準語（高地リトアニア方言）の acute と対応する音調であるが（例えば，LL rîts：SL rýtas），低地リトアニア方言のこの音調の声の裂け目は，標準語の acute のものより大きい。またこれと似た音調がラトヴィア語においても中断音調として存在するが，声圧の位置と声門の閉鎖の点で両者は異なっている。すなわち二重母音あるいは二重母音的結合における声圧の位置は，ラトヴィア語では両方の音素の要素の上に集中されるのにたいして，低地リトアニア方言では第一要素の上に集中される。また声門の閉鎖は，低地リトアニア方言においてより閉じられている[24]。この中断音調に類似した下降音調（´）は，低地リトアニア方言において次のような性質をもっている。「声の動きは上昇し下降する。その声の動きの上昇する部分は，下降する部分より短い。発音のさいの声圧は，突然上昇し，終わりではわずか長引いて同様に下降する」[25]。二重母音におけるこの音調の声圧の位置は，第一要素に集中される，例えば，LL ā.rklĩs：SL arklỹs。この下降音調は，上昇し下降するという声の動きに関して中断音調と類似しているが，中断音調はこの下降音調よりも長い時間が必要とされる。この二つの音調は，低地リトアニア方言では，その現れる環境によってそれぞれの現れを予期することができる[26]。例えば，Gen.sg. vârnas, blakstìena：Dat.sg. vãrnâ, blaksíenǫ̂u から分かるように，短音節を有する語尾前音節では中断音調が，長音節を有する語尾の前では下降音調が現れる。従って，この二つの音調は相補分布を成しており，音韻論的観点からすると下降音調は中断音調（あ

るいは他のリトアニア方言との関連から acute と呼ぶことができる）のヴァリアントといえる。以上のことから，低地リトアニア方言の音調の音声的実現は，標準リトアニア語におけるものとは非常に異なっているが，しかし音韻論的観点からすれば低地リトアニア方言の音調は，標準リトアニア語と同じく，acute と circumflex の二つの音調であり，短音調は両方言とも音調の対立のない短アクセント（grave）と見なすことができる。また低地リトアニア方言における韻律的対立は，標準リトアニア語と同様に三つの対立を成している。すなわち，アクセント位置による対立（例えば，vẽlka《狼，Gen.sg.》：vẹlkā《君は引っ張った》；pȧsaka《おとぎ話》：pasȧ̃ka《彼は話す》：pasakā《君は話す》），質の対立（音調の対立）（例えば，クレチンガ方言では[27]，dõm《2，Dat.》：dõm《2，Loc.》），および量の対立（例えば，trĩs 3, Nom.》：trĩs《3，Acc.》，lẹ̃gā《病気，Nom.sg.》：lẹ̃gā《病気，Dat.sg.》）。しかしアクセント位置による対立は，この方言では特に二音節語において第一音節に語アクセントの頂点を持つので，標準語ほど対立は強いものではない，例えば，LL gâlvas《頭，Nom.pl.》（SL gálvos）：LL gālvūos《Gen.sg.》（SL galvõs）の対立を参照せよ。

3．

クレチンガ方言（Лаучюте の資料による）の名詞のアクセントパラダイムは，韻律特徴によって二つの基本的グループに分けることができる。すなわち Gen.pl.の語尾の量とアクセント位置，あるいは Dat.pl.のアクセント位置による違いによって，曲用タイプの違いや語幹の音調の違いに関係無く，次のような基本的な区分が可能である：1）Gen.pl.形においては，語幹がどの音調を持つかに関わりなく，語尾は無アクセントの短音節であり，また Dat.pl.形においては語幹と語尾に二つのアクセントを持つことを特徴とする。これを AP. I .型と呼ぶことにする。2）Gen.pl.形においては，語幹と語尾に二つのアクセントをもち，語幹の音調に関わりなく，語尾は circumflex を有する長音節であり，また Dat.pl.形においては語尾にのみアクセント（音調は常に中断音調）を持つことを特徴とする。これを AP.II.型と呼ぶことにする。具体的なアクセントパラダイムを，Лаучюте の資料から二音節名詞に限って引用してみる[28]。その際，このクレチンガ方言の例と対応する標準リトアニア語の例のアクセントパラダイムも引用することにする。というのは，後述するようにこの二つの方言の間には密接な関係が見られるからである。なおクレチンガ方言においては標準語とは異なり，男性名詞の Nom.sg.形は語尾の弱化のため，一音節の語になっている（例えば，LL dūms：SL dũmas）。なお音調のある母音の長音記号は Лаучюте の記述に従って付けないことにする。つまり以下の記述においては，音調（grave は除く）を有する音節は常に長い，また無アクセントの長音節はその音節の右下の点“・”によって示される。

a) 語幹音調が LL で中断音調（または下降音調）を，SL で acute をもつ語：

	AP. I .《煙》		AP.II.《仕事》	
	LL	SL	LL	SL
Sg.				
Nom.	dûms	dū́mas (AP.1)	dârbs	dárbas (AP.3)
Gen.	dûma	dū́mo	dârba	dárbo
Dat.	dûmǫ̣u	dū́mui	dárbǫ̣u	dárbui
Acc.	dûma	dū́mą	dârba	dárbą
Inst.	dûmǫ̣	dū́mu	dârbǫ̣	dárbu
Loc.	dûmę	dū́me	dârbę	darbè
Pl.				
Nom.	dûmâ	dū́mai	dárbã	darbaĩ
Gen.	dûmu	dū́mų	dárbũ	darbų̃
Dat.	dûmâms	dū́mams	dar.bâms	darbâms
Acc.	dûmus	dū́mus	dârbus	dárbus
Inst.	dûmâs	dū́mais	dárbãs	darbaĩs
Loc.	dûmûs	dū́muose	dárbũs	darbuosẽ

上の例から分かるように，低地リトアニア方言(LL)の Gen.pl.形において，AP. I .はアクセントは語幹にのみあり，語尾音節は短い。他方，AP.II.ではアクセントは二つあり，語尾音節は長い。また Dat.pl.形において，AP. I .は語幹と語尾にアクセントを持つのに対して，AP.II.は語尾だけにアクセント(音調は中断音調)を持つ。その他の Pl.形において，Acc.pl.形を除いて，AP. I .は語尾に中断音調を持つのに対して，AP.II.では circumflex を有する語尾を持っている。Sg.形においては，Dat.形だけがどちらのアクセントタイプも語尾に中断音調を持っている。また低地リトアニア方言と標準リトアニア語（SL）のアクセントパラダイムを比較すれば，次のことが分かる：1）SL の acute を特徴とする語幹固定アクセントパラダイム（AP.1）の二重母音あるいは二重母音的結合である長音節を有する語尾に，LL の中断音調をもつ語尾が対応する。2）SL の acute 語幹を特徴とする移動アクセントパラダイム（AP.3）の circumflex を有する長音節語尾に，LL の circumflex をもつ長音節語尾が対応する(Loc.Pl.形を除いて)。これらの事から，SL と LL のアクセントパラダイムの間には，そのアクセントタイプの相違とは無関係に，次の対応があることが分かる：SL において語幹アクセントの場合，LL においては，ある格形において語尾に中断音調があるにもかかわらず，語幹には必ずアクセントがあり，語尾には中断音調以外のアクセントはない。SL において語尾にアクセントを持つ場合，

それが acute である場合を除いて，LL においては語幹にもアクセントをもち，acute である場合には，LL において語尾にのみ中断音調をもつ。

b) 語幹音調が LL で circumflex (または第二引き伸ばし音調)，SL で circumflex をもつ語：

	AP. I.《場所》		AP.II.《板》	
	LL	SL	LL	SL
Sg.				
Nom.	vẹ̃itā	*vietā* (AP.2)	lẹ̃ntā	lentā (AP.4)
Gen.	vẹ̃itas	viẽtos	lẹ̃ntūos	lentõs
Dat.	vẹ̃itâ	viẽtai	lẹ̃ntâ	leñtai
Acc.	vẹ̃ita	viẽtą	lẹ̃nta	leñtą
Inst.	vẹ̃itò	*vietā*	lẹ̃ntò	*lentā*
Loc.	vẹ̃itûo	viẽtoje	lẹ̃ntūo	lentojè
Pl.				
Nom.	vẹ̃itas	viẽtos	lẹ̃ntas	leñtos
Gen.	vẹ̃itu	viẽtų	lẹ̃ntū	lentų̃
Dat.	vẹ̃itûoms	viẽtoms	lẹn.tûoms	lentõms
Acc.	vẹ̃itās	*vietàs*	lẹ̃ntàs	*lentàs*
Inst.	vẹ̃itûoms	viẽtomis	lẹ̃ntūoms	lentomìs
Loc.	vẹ̃itûos	viẽtose	lẹ̃ntūos	lentosè

(イタリック体はソシュールの法則の働いた格形)

語幹音調が circumflex である場合も，前例の語幹音調が acute の場合と同様に，LL の Gen. pl.形において，AP. I.ではアクセントは語幹にのみあり，語尾音節は短い。他方，AP.II.ではアクセントは語幹と語尾の両方にあり，語尾音節は長い。また Dat.pl.形において，AP. I.は語幹と語尾の両方にアクセントをもつのに対して，AP.II.は語尾にのみアクセント（音調は中断音調）をもつ。また，ソシュールの法則が働いた格形では，いずれも語幹と語尾の両方にアクセントをもち，語尾は短アクセントを持っている。また低地リトアニア方言と標準リトアニア語のアクセントパラダイムを比較すれば，次のことがわかる：1)SL の語幹アクセントの格形における二重母音 (あるいは二重母音的結合) または二音節語尾をもつ語尾に，LL の中断音調をもつ語尾が対応する。2) SL の語尾アクセントの格形における circumflex あるいは二音節語尾をもつ語尾に，LL の circumflex をもつ語尾が対応する。従って，この circumflex を有する語幹の場合においても SL と LL のアクセントパラダイムの間には，そのアクセントパラダ

イムの相違にもかかわらず，acute を有する語幹に見られたと同じ対応があることがわかる。すなわち，SL において語幹アクセントの場合，LL においては，ある格形において語尾に中断音調があるにもかかわらず，語幹には必ずアクセントがあり，語尾には中断音調以外のアクセントはない。SL において語尾に acute を特徴とするアクセントのある場合には，LL においては語尾にのみ中断音調をもつ。

c）語幹音調が LL で短アクセント（あるいは中間音調）を，SL で grave（ある場合には二次的な延長化のために circumflex）をもつ語：

	AP. I.《えぞ松》		AP.II.《ライムギ》	
	LL	SL	LL	SL
Sg.				
Nom.	ẽglę	ẽglė（AP.2）	rǫ̃gỹs	rugỹs（AP.4）
Gen.	ẽglęs	ẽglės	rǫ̃gę	rùgio
Dat.	ẽglę̃	ẽglei	rǫ̃g'ǫ̃u	rùgiui
Acc.	ẽglę	ẽglę	rǫ̃gi	rùgį
Inst.	ẽglę̃	*eglẽ*	rǫ̃g.'ǫ̃	*rugiũ*
Loc.	ẽglîe	ẽglėje	rǫ̃gîe	rugyjè
Pl.				
Nom.	ẽglęs	ẽglės	rǫ̃gẽ	rugiaĩ
Gen.	ẽgl'u	ẽglių	rǫ̃g'ũ	rugiũ
Dat.	ẽglîems	ẽglėms	rǫgêms	rugiáms
Acc.	ẽglę̃s	*eglẽs*	rǫ̃g'ùs	*rugiùs*
Inst.	ẽglîems	ẽglėmis	rǫ̃gẽs	rugiaĩs
Loc.	ẽglîes	ẽglėse	rǫ̃g'ũs	rugiuosè

（イタリック体はソシュールの法則が働いた格形）

語幹が短アクセントをもつ上の例においても，低地リトアニア方言では，Gen.pl.形において，AP. I .型はアクセントは語幹にのみあり，語尾音節は短い。他方，AP.II.型はアクセントは語幹と語尾の両方にあり，語尾音節は長い。また Dat.pl.形において，AP. I .型は語幹と語尾に二つのアクセントをもつのに対して，AP.II.型は語尾のみにアクセント（音調は中断音調）を持っている。低地リトアニア方言と標準リトアニア語のアクセントパラダイムを比較すれば，次のことがわかる：1）SL のソシュールの法則が働いた格形において，LL では語幹と語尾の両方にアクセントを持つ。2）SL の AP.2 の語幹アクセントの語が，語尾に二重母音（または

二重母音的結合）を持つ場合，あるいは語尾が二音節である場合，LL の対応する語においては，語幹アクセントと共に語尾に中断音調をもつ。3)SL の AP.4 の語尾に circumflex を有する語，あるいは二音節語尾にアクセントをもつ語は，LL において語幹アクセントのほかに circumflex を有する語尾をもつ。これらの事から，SL と LL のアクセントパラダイムの間には，そのアクセントパラダイムの相違にかかわらず，次の対応があることが分かる：SL において語幹アクセントの場合，LL において，ある格形の語尾に中断音調があるにもかかわらず，語幹には必ずアクセントがあり，語尾にはある格形を除いてアクセントはない。SL において語尾に acute を特徴とするアクセントがある場合，LL においては語尾にのみ中断音調がある。

上で観察された低地リトアニア方言の各音調によって，低地リトアニア方言のアクセントパラダイムは，次のように下位区分できる。AP.Ⅰ.型は，さらに AP.Ⅰ.型の acute の語幹をもつタイプ(以後，AP.Ⅰ.a.型と呼ぶ)，同じ型の circumflex の語幹をもつタイプ(以後，AP.Ⅰ.b.型と呼ぶ)，および同じ型の grave を語幹とするタイプ（以後，AP.Ⅰ.c.型と呼ぶ）にわけることができる。AP.II.型は，同じく acute の語幹をもつタイプ(以後，AP.II.a.型と呼ぶ)，circumflex の語幹をもつタイプ（以後，AP.II.b.型と呼ぶ)，および grave を語幹とするタイプ（以後，AP.II.c.型と呼ぶ)にわけることができる。これらの各々のアクセントタイプは，標準リトアニア語のアクセントタイプと以下のように対応している（括弧内は音調を記す)[29]：

LL		SL
AP.Ⅰ.a.（ˆ/ˊ）	:	AP.1（ˊ）
b.（˜/ˆ）	:	AP.2（˜）
c.（˜/ˋ）	:	AP.2（˜）
AP.II.a.（ˆ/ˊ）	:	AP.3（ˊ）
b.（˜/ˆ）	:	AP.4（˜）
c.（˜/ˋ）	:	AP.4（˜）

またアクセントパラダイムの相違や語幹音調の相違にもかかわらず，低地リトアニア方言と標準リトアニア語の間には，次のようなアクセントと音調の間の対応がみられる：標準リトアニア語においてアクセントが語幹にあるとき，低地リトアニア方言においてはアクセントは必ず語幹にあり，語尾が長音節の場合には語尾にも中断音調をもつ。標準リトアニア語においてアクセントが語尾にあるとき，低地リトアニア方言では二つの場合にわけられる。1）標準リトアニア語の語尾のアクセントが circumflex あるいは grave であるとき，低地リトアニア方言では語幹と語尾の両方にアクセントをもつ。2）標準リトアニア語の語尾のアクセントが acute であるとき，低地リトアニア方言では語尾にのみ中断音調のアクセントをもつ。

4.

上では共時的な低地リトアニア方言のアクセント法を観察した。これを基にして，以後では通時的なアクセント法を考察してみたい。上で述べたように，リトアニア語の acute の現れる場所は，印欧祖語（以後 PIE と略す）の喉音（laryngeal：記号Hで記す）の存在が仮定される場所と一致することが知られている[30]。例えば，PIE の Barytone 形に東バルト語の Barytone 形の対応する例：SL vĩlna《動物の毛》(AP.1)，Latv. viĩna<*u̯¹l̥HnaH：Skt. (RV) ū́rṇā《羊毛》；SL pĩeva《草地》(AP.1)<*p¹oHiu̯aH：Gk.pōā（<*pōiu̯ā），等。また，所謂 Hirt の法則[31]が働く場合の PIE の Mobile-Oxytone 形に東バルト語の Barytone 形の対応する例：SL vỹras《男；夫》(AP.1)，Latv. vĩrs<*u̯iHr¹os：Skt. (RV) vīrás；SL dū́mas《煙》(AP.1)，Latv. dūmi (Pl.)<*dhuHm¹os：Skt. (RV) dhūmás，等。矢野教授（1985a）[32]によれば，中断音調は laryngeal の消失に伴って次のようなアクセント音節との位置に関して，相対年代的に発達したという：A）まずアクセント直前の音節に中断音調（記号ˆ）が生じ，アクセントはその音節に推移した（これは上のHirtの法則が働く場合である：SL dúona《パン》(AP.1)<*dônā<*dhoHn¹aH)。B）次に，アクセント音節において中断音調が生じた（SL vĩlna《動物の毛》<*u̯ĩnā<*u̯¹l̥HnaH)。C）最後にアクセント直後の音節に中断音調が生じ，アクセントはその音節へ推移した（SL rankà《腕，手》<*rankâ<*u̯r¹onkaH《曲がった物》：これは所謂ソシュールの法則が働く場合である)。このような laryngeal と結び付いた中断音調は，低地リトアニア方言においても AP. I .型の語幹音節に中断音調として現れている：LL dûms《煙》，vĩrs《男；夫》，等。また低地リトアニア方言の AP.II.型の Dat.pl.形は，語尾にのみ中断音調をもち，標準リトアニア語の acute とアクセント位置が一致している（例えば，LL lẹn.tûoms：SL lentõms)。上で述べたようにここに中断音調が仮定されるならば，低地リトアニア方言の AP.II. 型の Dat.pl. 形の中断音調の起源は，非常に古いものであることを示している。すなわち，LL lẹn.tûoms《板》(SL lentõms) は，以下のように再建することができる：lẹn.tûoms (<lentôms)<*lentâmus<*lentaHm¹oHns (cf. Germ. lindõ《リンデン》，Skt. latā《蔓》<*l̥ntā ゼロ階梯)[33]。つまり，Hirtの法則のためにアクセント直前音節に中断音調が生じ，アクセントはその音節へ推移した。これが低地リトアニア方言においても保持された。この際，低地リトアニア方言においては，アクセントは語尾から語幹に後退することはなく，語幹にいかなる音調も生じなかった。これは本来的な中断音調の起源と中断音調の独特の音声的特徴とに関係づけられると考えられる。なお*o-語幹のAP.II.型のDat.pl.に見られる中断音調（LL dar.-bâms：SL darbãms）は，語幹末にlaryngealの存在は仮定されないのであるから（-ams<*-om¹us<*-om¹oHns)，*ā-語幹の影響による二次的起源とみなされる[34]。次に，標準リトアニア語においてソシュールの法則が働いた形，すなわち Nom.sg. vietà《場所》(AP.2)，Inst.sg. vietã，Acc.pl. vietàs；Inst.sg. lentà《板》(AP.4)，Acc.pl. lentàs は，低地リトアニア方言で

は，Nom.sg. vẹ̑itā（AP. I .），Inst.sg. vẹ̑itō，Acc.pl. vẹ̑itās；Inst.sg. lẹ̑ntō（AP. II.），Acc. pl. lẹ̑ntās のように語幹と語尾にアクセントをもっている。伝統的にこれらの標準語の形は，1章で述べたようにソシュールの法則とレスキーンの法則によって説明されてきた。例えば，Nom.sg.(1) *r¹añkā́>(2)*rañk¹ā́>(3) rankā の変化において，(1)の段階における歴史以前のリトアニア語における，アクセント音節とは独立した語幹と語尾の両方の音調の存在，(2)の段階における circumflex を有する音節から acute を有する音節へのアクセント推移，そして(3)の段階における語末の acute の短縮が仮定された。この仮説を低地リトアニア方言の資料から認める研究者は多い。前述したように低地リトアニア方言の lẹn.tûoms（Dat.pl.）形においては，本来的な中断音調の前の語幹音節へアクセントは後退することはなく，語幹にいかなる音調も持ってはいない。もしソシュールの法則の(2)の段階でアクセント音節の下に中断音調が生じたならば，低地リトアニア方言では*vẹitā<*vẹitâ<*u̯¹oitaH（Nom.sg.）が期待され，語幹音節に音調が生じることはなかったのではかろうか。しかし実際の低地リトアニア方言においては，vẽitā のように語幹と語尾に音調を持っている。従って，この語幹の circumflex は，語尾に中断音調をもっていたときには存在せず，語尾の中断音調が短縮された後の，短アクセントを有する語尾からの二次的なアクセント後退とみなされねばならない。すなわち，ここで問題となる語形は，所謂ソシュールの法則を認めるにしても，ソシュールの法則とレスキーンの法則が働いた後の，低地リトアニア方言において後に生じたアクセント後退と見なされねばならない[35]。ここでは，ソシュールの法則を認めない矢野教授の仮説によって説明できる[36]。すなわち，Nom. sg.（クレチンガ方言）vẹ̑itā<LL vẹ̑itā<veitā<*veitâ<*u̯¹oitaH：Germ. *wáiþō（Illič-Svityč：§4）。Inst.sg.（クレチンガ方言）vẹ̑itō<LL vẹ̑itō<*veitō<*veitô<*veitân<*u̯¹oitaHn；Acc.pl.（クレチンガ方言）vẹ̑itās<vẹ̑itās<*veitās<*veitâs<*u̯¹oitaH(n)s。次に，低地リトアニア方言において，語幹にどのような種類の音調があろうとも，語尾に中断音調が見られるのは以下の格形である：Dat.sg. vẹ̑itâ《場所》（AP. I .：SL viẽtai，AP.2），Loc. sg. vẹ̑itûo（SL viẽtoje），Dat.pl. vẹ̑itûoms（SL viẽtoms），Inst.pl. vẹ̑itûoms（SL viẽtomis），Loc.pl. vẹ̑itûos（SL viẽtose）；Dat.sg. lẹ̑ntâ《板》（AP. II.：SL leñtai，AP.4）；Dat.sg. dûmọ̑u《煙》（AP. I .：SL dũmui，AP.1），Nom.pl. dûmâ（SL dũmai），Dat.pl. dûmâms（SL dũmams），Inst.pl. dûmâs（SL dũmais），Loc.pl. dûmûs（SL dũmuose）；Dat.sg. dárbọ̑u《仕事》（AP. II.：SL dárbui）；Dat.sg. ẽglê《えぞ松》（AP. I .：SL ẽglei，AP.2），Loc.sg. ẽglîe（SL ẽglėje），Dat.pl. ẽglîems（SL ẽglėms），Inst.pl. ẽglîems（SL ẽglėmis），Loc.pl. ẽglîes（SL ẽglėse）；Dat.sg. rọ̑g'ọ̑u《ライムギ》（AP. II.：SL rũgiui，AP.4）。上の例において，固定アクセントタイプに属する AP. I .型は，いずれも本来的に語幹にアクセントをもつ格形である。また，移動アクセントタイプに属する AP. II.型の Dat.sg.の形も，*ā-語幹，*o-語幹，*ē-語幹等の名詞は，二次的に語幹にアクセントをもつ格形である[37]。このことは対応する標準リトアニア語によっても確認できる。また語幹にアクセントを有する語の，語尾における中断音調の

発達について各語幹ごとにみると以下のようになる。前述したように，*ā-語幹名詞のDat.sg.の語尾には母音間でのlaryngealの消失によって，中断音調は本来発達しない[38]：-ai<*āi<*-aHei。Loc.sg.の語尾は二次的派生であり，印欧語本来の語尾*-āiに後置詞（postposition）*-ên（*-eIIn ?）が付加したものである[39]。この語尾は，標準リトアニア語から以下のことが仮定できる：1）後置詞はacuteであった（galvojè），2）後置詞に先行するlaryngealは中断音調を生ずることなく消失した（rañkoje），3）語幹末は長音の*-ā-であった（*-āję̄>-ojè）。従ってこれは複雑な問題を提起している。Kortlandt[40]は，以下のようにこの問題を解決しようとしている。*o-語幹のLoc.sg. butèを*būtę̄ eNあるいは*būtę̄ ę と仮定し，この段階でlaryngealがglottal stopのようなものであるとして，語境界のかわりに*Hを用いる：*būtę̄HeN，*būtę̄Hę。そのlaryngealが分節的状態を失い，母音特徴になると，それは*būtę̄(=būtę̄)>butēに変化した。一方，*ā-語幹の*rōNkaHi eNは，同様に*rōNkaHiHeN>*rānkāi̯ę̄ になった。この際，最初のlaryngealは異化によって消失した。従って，この形には上の三つの条件を満たしている。これに対して別の仮説も可能である[41]。すなわち，Loc.sg.の本来の語尾に後置詞*-ên (cf. i̯<in) をさらに付加したのは，Dat.sg.の語尾*-āiとの混同を避けるためであった。そう仮定するならば，Loc.sg.とDat.sg.の語尾はこの時すでに混同されていた可能性があり，Loc.sg.の後置詞に先行する音節には中断音調は存在していなかったであろう。すなわち，*-ai-ên>*-ājên>-āję̄>-ojē>-o(j)>LL-uoの発達を仮定することができ，上の三つの条件を満たしている。また，Loc.pl.の語尾は，Loc.sg.と同様に，印欧語本来の語尾*-āsu ではなく，Acc.pl.の語尾*-ās (<*-eH(n)s) に後置詞*-ên が付加された二次的派生である[42]。この場合も Loc.sg.の語尾と同様に三つの条件を満たさなくてはならない (galvosè, rañkose, *-āsę̄)。従って，語幹末音節は本来的な Acc.pl.由来のものではなくて，Loc.sg.の影響によって中断音調のない長音節が用いられたのであろう。すなわち，*-ās-ên>*-āsę̄>-osè<LL-uos と発達したものと仮定することができる。Dat.pl.の語尾は，上で述べたように移動アクセントパラダイムでは，Hirtの法則が働いているので中断音調が生じたが，固定アクセントパラダイムでは中断音調は発達しなかった (rañkoms)。これはおそらく，Loc.の rañkoje, rañkose の影響によるものと思われる。Inst.pl.の語尾もまた仮定される中断音調は発達していない (rañkomis)[43]。おそらくこの語尾もLoc.sg., pl.の影響によって中断音調のない長音節が用いられたのであろう。すなわち，*-ā-mīs>-omis>-oms>LL-uomsの発達が仮定できる。*o-語幹名詞については，Dat.sg.の語尾は*-ŏ-ĕi>*-ōi>*-uoi>LL-ou（クレチンガ方言-ọu）と仮定でき[44]，中断音調の発達はない。Nom.pl.の語尾は，代名詞起源の二次的語尾でありそれは*-oi>-ai>LL-a と仮定でき[45]，中断音調の発達はない。これを示しているのは，また標準リトアニア語の AP.2 の Nom.pl. rātai 形である。Dat.pl.の語尾は，*-ŏ-mus>-amus>-ams からわかるように本来は中断音調を発達しない[46]。中断音調の本来的欠如については，Dat.pl. rātams から確認できる。Inst.pl.の語尾は，不明な点があるが，*-ois(*-ōis)>-ais>LL-as と仮定でき[47]，rātais から中断音調

は発達しなかったであろう。Loc.pl.の語尾は，*ā-語幹の語尾と同様に，*o-語幹のAcc.pl.の語尾*-uos（<*-oH(n)s)[48]と後置詞*-ênとの結合から生じたものである。この語尾もまた*ā-語幹のLoc.の語尾のように，後置詞の音調がacuteであること，語幹末音節に中断音調が生じなかったこと，およびその音節に長音-ō-を有したことの三条件を満たさなければならない(rãtuose)。従って，この語尾においても*ā-語幹のLoc.の語尾*-āsênの影響が働いたと仮定できる。すなわち，*-ōs-ên>*-uos-ę>SL-uose (LL-us) の発達が仮定できる。*ē-語幹名詞に関しては，上で述べた*ā-語幹と同じ発達を示している[50]。Dat.sg.の語尾は，*ā-語幹と同様に母音間での laryngeal の消失によって中断音調は発達しない：LL-e<-ei<*-ēi<*-eH-ei。Loc.sg.の語尾は，本来の語尾*ēi (<*eHi) に*ā-語幹の場合と同様に後置詞*-ên が付加した二次的派生である。この場合も*ā-語幹で考察された状況と同様な影響があったのであろう。すなわち，Dat.sg.の語尾との混同のために，後置詞*-ênが付加されたと仮定すると，Loc.sg.においては中断音調はすでに存在していなかった。それはûpėjeから確認できる。Loc.pl.の語尾は，Acc.pl.語尾と*-ênの結合による二次的派生である。この場合も*ā-語幹と同様に，Loc.sg.の語尾に影響されて，後置詞の前では中断音調のない長音が用いられたのであろう(ûpėse)。つまり，*-ēsên>*-ēsę>*-ėsė>LL-iesの発達が仮定できる。Dat.pl.の語尾は，*ā-語幹と同様に移動アクセントパラダイムでは，中断音調が期待される：*-eHmoHns>*-êmus。しかし，固定アクセントパラダイムでは*ā-語幹と同様に Loc.の語尾に見られる中断音調のない長音が用いられている(ûpėms)。これは Loc.の影響であろう。Inst.pl.の語尾もまた，*ā-語幹と同様に Loc.の影響によって中断音調のない長音が用いられている(ûpėmis)。これもまた，Loc.の影響による二次的な語尾であろう。*i̯iŏ-語幹に関して[51]，Dat.sg.の語尾は*o-語幹と同様に，*i̯iŏ-ei>*i̯iōi>*-i̯ōi>*-iuoi>LL-iouと仮定され，中断音調は発達しない。以上から，Loc.sg., Dat.pl., Inst.pl.および Loc.pl.の語尾は，その中断音調の起源に関して曖昧な点を残しているが，標準語から推測して中断音調の発達はなかったであろう。またこのことを支持するのは，これら全ての語尾の特徴である。すなわち，中断音調が生じている語尾は，二重母音（あるいは二重母音的結合）による末尾要素によってその長音性を保持し，語末において短縮を蒙ることはなかったという特徴である。そのような末尾要素のない長音は，低地リトアニア方言においては規則的に短縮を蒙り，そこに中断音調は生じていない，例えば，Acc.sg. dûma (SL dū̃mą), Gen. pl. dûmu (SL dū̃mų), Acc.pl. dûmus (SL dū̃mus)。従って，低地リトアニア方言に見られる語幹アクセントを有する語尾の中断音調は，低地リトアニア方言における二次的な後の発達とみなされ，その起源は移動アクセントタイプの Dat.pl.形(例えば，lėn.tûoms)における中断音調の影響に求められるかもしれない。つぎに，標準リトアニア語において語尾に circumflex あるいは短アクセントを有する語形は，そのアクセント位置はソシュールの法則の働いた場所を除いて，本来の位置を保持している。それ故，低地リトアニア方言の対応する語形が，アクセント後退を引き起こした形と考えられる。また低地リトアニア方言には，ソシュールの法則

が働いたことは既に述べたが，このソシュールの法則が働いた語形においてもアクセント後退が起こっていることを考えると，このアクセント後退はそう古いことではないであろう。前述したように，一般に低地リトアニア方言では，語尾の短アクセントから語尾直前の長音節にアクセント後退が起こる場合には，第二引き伸ばし音調（ˆ）が，それ以外への長音節へのアクセント後退が起こる場合には，中間音調（ˇ）が生じる。また語尾の circumflex から先行する長音節へのアクセント後退は，どの先行音節においても中間音調が生じる。しかし，Лаучюте の資料では，これは変化を受けている。すなわちここでは，短アクセントを有する語尾からのアクセント後退は，先行する音節が長いときには circumflex を（例えば，LL lẹ̃ntã：SL lentã），先行する音節が短いときには短アクセントを獲得する（例えば，LL ègl̥ẹ̃：SL eglè）。他方，circumflex を有する語尾からのアクセント後退は，先行する音節が長いときには下降音調（ˆ）か第二引き伸ばし音調を（例えば，LL dãrbã：SL darbaĩ，LL lẹ̃ntũos：SL lentõs），先行する音節が短いときには短アクセントを獲得する(例えば，LL rõgỹs：SL rugỹs)。circumflex からのアクセント後退による音節の下降音調と第二引き伸ばし音調との違いは，そのアクセントパラダイムの型によって決まる。すなわち，AP.II.a.型では下降音調を，AP.II.b.型では第二引き伸ばし音調を獲得する。すなわち，ここではアクセントパラダイム内での音調の均一化が生じている。

5.

低地リトアニア方言における二音節語の音調の起源に関して，次のようにまとめることができる：1）本来的な非アクセント語尾音節に現れる中断音調は，二次的な発達である。2）本来的な非アクセント語幹音節に現れる circumflex あるいは短アクセントは，語尾からのアクセント後退によって生じた二次的な発達である。3）本来的なアクセント音節に現れる中断音調，circumflex および短アクセント(grave)は，本来の音調または短アクセントを保持している。これらのことは，本来，アクセント音節にのみ音調の対立が存在していたことを仮定させ，高地リトアニア方言（特に標準リトアニア語）の韻律的特徴のほうが，低地リトアニア方言の韻律的特徴より古い姿をとどめていることを示している。このような低地リトアニア方言の韻律的特徴の改新は，様々に考察されてきた。ある研究者は，言語内部にその原因に求め（例えば，K. Jaunis，Grinaveckis：1957，Kazlauskas：1968，[52]等），また他の研究者は近隣のバルト・フィン系民族との接触によるものと考えている（例えば，Salys, Zinkevičius：1966，等）。この中で Zinkevičius の考えが注目される。彼によれば，バルト海沿岸のフィン系民族は，低地リトアニア人やラトヴィア人と同様に，アクセントを語頭へ後退させるだけでなく，アクセントの後の音節に副次アクセントをもっている。バルト海沿岸のフィン系民族の副次アクセントは，その配置に関して，ラトヴィア語の副次アクセントを思い起こさせ，そのアクセント体系は，低地リトアニア方言やそれに隣接する高地リトアニア方言に驚くほど似ているという[53]。

さらにアクセント後退の現れている地域を示している地図(2)（末頁参照）からもこれは窺える。地図(2)[54]において，網目模様は，短アクセントおよびcircumflex音調を有する語尾から，任意の長さの音節へのアクセント後退を示す無条件的なアクセント後退が現れる場所を示している（例：gỹvã̃, šãkã̃, gỹvũ̃, šãkũ̃)。縦線模様は，たんに短アクセントを有する語尾から，任意の長さの音節へアクセント後退を示す条件的なアクセント後退が現れる場所を示している（例：gỹvã̃, šãkã̃, しかしgyvũ̃, šakũ̃)。横線模様は，たんに短アクセントを有する語尾から，長音節へのみアクセント後退を示す条件的なアクセント後退が現れる場所を示している（例：gỹva, しかしšakã, gyvũ̃, šakũ̃)。この無条件的アクセント後退の現象が，リトアニアの北西部に強くみられ，南東部に行くに従って次第にそのアクセント後退も条件的になり，リトアニアの南東部ではアクセント後退が見られないことは，リトアニア語内部の言語的現象としてのみアクセント後退をみることを許さない。Zinkevičiusが述べているように，バルト・フィン系民族との接触の結果と考えられる。このことはまた，高地リトアニア方言のほうが低地リトアニア方言より韻律的特徴の古さをとどめているという考えと一致している。

註

0）本稿について矢野通生先生より貴重な助言をいただいた。また貴重な文献をお貸しいただいた。心から感謝申し上げたい。

1）Zinkevičius（1966）pp.11-17，及び地図はp.446参照。

2）Grinaveckis（1973）pp.12-24参照。

3）Лаучюте（1979）p.146参照。

4）Lietuvių kalbos gramatika Ⅰ.（1965）pp.130-135参照。

5）Lietuvių kalbos gramatika Ⅰ.（1965）pp.135-137参照。

6）Saussure（1896）pp.526-538，及び，矢野（1985a）pp.15-17参照。

7）Inst.sg.の語尾は，印欧語では本来的に-nの要素をもっていない（OInd. jihvā́）が，リトアニア語の限定形容詞gerą-jaからバルト語では鼻音要素が仮定される（cf.Sl. rǫkǫ)。Zinkevičius（1980）pp.190-191，Stang（1966）p.199参照。

8）Acc.pl.の語尾は，リトアニア語の限定形容詞gerąs-iasから*-aHnsが期待されるが，東リトアニア地域と低地リトアニア方言のgerõs-ias（LL gerúoses)，およびIllative pl. šakõs-naから*-aHsが再建される。Zinkevičius（1980）pp. 194-195，Stang（1966）p.200参照。

9）矢野教授の御教示による。さらにKortlandt（1975）p.44参照。

10）Mažiulis（1970）p.309，Zinkevičius（1989）pp.190-191参照。

11）矢野（1985a）pp.1-5，Дыбо（1977）pp.584-585参照。

12）Zinkevičius（1966）pp.38-39参照。

13）Aleksandravičius（1957）p.98参照。

14）Aleksandravičius（1957）pp.100-106参照。

15）Лаучюте（1979）p.147-152参照。

16) Grinaveckis (1973) p.98 参照。
17) Grinaveckis (1973) pp.84-88 参照。
18) Grinaveckis (1973) pp.93-94 参照。
19) Kazlauskas (1968) pp.6-7 参照。
20) Grinaveckis (1973) pp.94-95 参照。
21) Лаучюте (1979) p.155 参照。
22) Grinaveckis (1973) pp.94-96 参照。
23) Grinaveckis (1973) pp.88-92 参照。
24) Aleksandravičius (1957) p.104 参照。
25) Aleksandravičius (1957) p.106 参照。
26) Kazlauskas (1968) p.6 参照。
27) Zinkevičius (1966) pp.206-207 参照。
28) Лаучюте (1979) pp.154-155 参照。
29) 低地リトアニア方言と標準リトアニア語のアクセントタイプの対応は,他の多くの語においても認められる。Лаучюте からの例 : LL の AP. I .a.と SL の AP.1 の対応例 : sę̃ina : síena《壁》, ǫ̃mž'ǫs : ámžius《世紀》, brûolis : brõlis《兄弟》; LL の AP. I .b.と SL の AP.2 の対応例 : pãršǫs : paŕšas《子豚》, pę̃ršts : piŕštas《指》, švę̃ntę : šveñtė《祭日》; LL の AP. I .c.と SL の AP.2の対応例 : rãts : rãtas《車輪》, blǫ̃sà : blusà《蚤》; LL の AP. II .a.と SL の AP.3の対応例 : árklĩs : arklỹs《馬》, dâigs : dãigas《芽》; LL の AP. II .b.と SL の AP.4の対応例 : gâidĩs : gaidỹs《雄鶏》, gârbĩe : garbẽ《名誉》; LL の AP. II .c.と AP.4の対応例 : lãšǫs : lãšas《滴》, mę̃šks : miškas《森》, 等。なお,このような対応を示さない例がまれにある : LL の AP. I .a.と SL の AP.4 の例 : smę̃ltis : smilĩtys《砂》; LL の AP. I .b.と SL の AP.1 の例 : rĩemâ : SL rẽmai《枠》; LL の AP. I .b.と SL の AP.3 の例 : lũovis : lovỹs《桶》; LL の AP. II .c.と AP.2 の例 : bę̃tę̃s : bìtė《蜜蜂》, mǫ̃sę̃s : mùsė《蝿》; LL の AP. II .c.と SL の AP.1/4 の例 : rũšę̃s : rũšis/rũšis《種類》。
30) Saussure (1894), 矢野 (1985 a) pp.7-15 参照。再建形は, Иллич-Свитыч (1963) を参照。
31) 所謂 Hirt の法則とは, Bonfante と Иллич-Свитыч によって修正されたものであり, アクセントが先行する非交替的な長音節へ後退することをいう : PIE *dhuHm¹os : SL dũmas《煙》。Hirt の法則が働かない場合は, 語根に schwa primum を有する二音節連続を含むときか, 交替的な長母音を含む場合である : PIE *gholəu̯¹a : SL galvã《頭》; PIE *i̯oun¹os : Latv. jaũns《若い》。Иллич-Свитыч (1963) p.78-81 参照。
32) 矢野 (1985a) pp.14-15参照。
33) 語の再建形は, Иллич-Свитыч (1963) p.26, Дыбо (1981) p.43を参照。語尾については, 矢野 (1987) pp.8-9参照。
34) 矢野 (1987) p.17参照。
35) これについては, さらにKortlandt (1977) pp.325-326を参照されたい。
36) 矢野 (1985a) pp.15-17, 矢野 (1987) p.2参照。
37) 矢野 (1987) pp.7-8, 16参照。
38) Stang (1966) p.198, Zinkevičius (1980) p.190参照。
39) Stang (1966) p.199, Zinkevičius (1980) pp.191-192参照。
40) Kortlandt (1975) p.49参照。
41) 矢野教授の御教示による。
42) Stang (1966) p.201, Zinkevičius (1980) pp.196-198参照。
43) Stang (1966) pp.200-201, Zinkevičius (1980) pp.195-196参照。

44) Stang (1966) p.181, Zinkevičius (1980) p.209参照。
45) Stang (1966) p.184, Zinkevičius (1980) pp.210-211参照。
46) Stang (1966) pp.185-186, Zinkevičius (1980) pp.211参照。
47) Stang (1966) p.186, Zinkevičius (1980) p.212参照。
48) リトアニア語の*o-語幹名詞のAcc.pl.形は，ソシュールの法則がここに働いている (ratūs)。また，限定形容詞gerūos-ius, Illative pl. miškūos-naから，この語尾がacuteを持っていたことがわかる。このことからこの語尾は，印欧語本来の語尾*-onsではなくて，*ā-語幹のAcc.pl.からの影響によって*-oH(n)sに変化したものと思われる。これについては，矢野(1987)p.13参照。また，*o-語幹のAcc.pl.については，Zinkevičius (1980) pp.211-212参照。
49) Stang (1966) pp.186-187, Zinkevičius (1980) pp.212-213参照。
50) *ē-語幹については，Zinkevičius (1980) pp.204-206参照。
51) *i̯i̯ō-語幹については，Zinkevičius (1980) pp.216-217参照。
52) Kazlauskas (1968) pp.20-29参照。
53) Zinkevičius (1966) pp.45-46参照。
54) 地図(2)は，Zinkevičius(1966)p.447からのものである。また，Lietuvių kalbos atlasas II Fonetika (1982) の地図№105 参照。

参考文献

Aleksandravičius, J. 1957. "Kirtis ir priegaidė Kretingos tarmėje", *Lietuvių kalbotyros klausimai*, t. I, 97-107.

Būga, K. 1961. *Rinktiniai raštai*, III, Vilnius.

Дыбо, В. А. 1977. "Работы ф. де Соссюра по балтийской акцентологии", *Ф. де Соссюр. Труды по языкознанию*. Москва.

1981. *Славянская акцентология. Опыт реконструкции системы акцентных парадигм в праславянском*. Москва.

Grinaveckis, V. 1957. "Šiaurės vakarų dūnininkų tarmių kirtis", *Lietuvių kalbotyros klausimai*, t. I, 109-118.

1973. *Žemaičių tarmių istorija (fonetika)*, Vilnius.

Иллич-Свитыч, В. М. 1963. *Именная акцентуация в балтийском и славянском*. Москва.

Kazlauskas, J. 1968. *Lietuvių kalbos istorinė gramatika*, Vilnius.

Kortlandt, F.H.H. 1975. *Slavic accentuation : A study in relative chronology*. Lisse.

1977. "Historical laws of Baltic accentuation", *Baltistica* 13, 319-330.

1978. "On the history of Slavic accentuation", *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung* 92, 269-281.

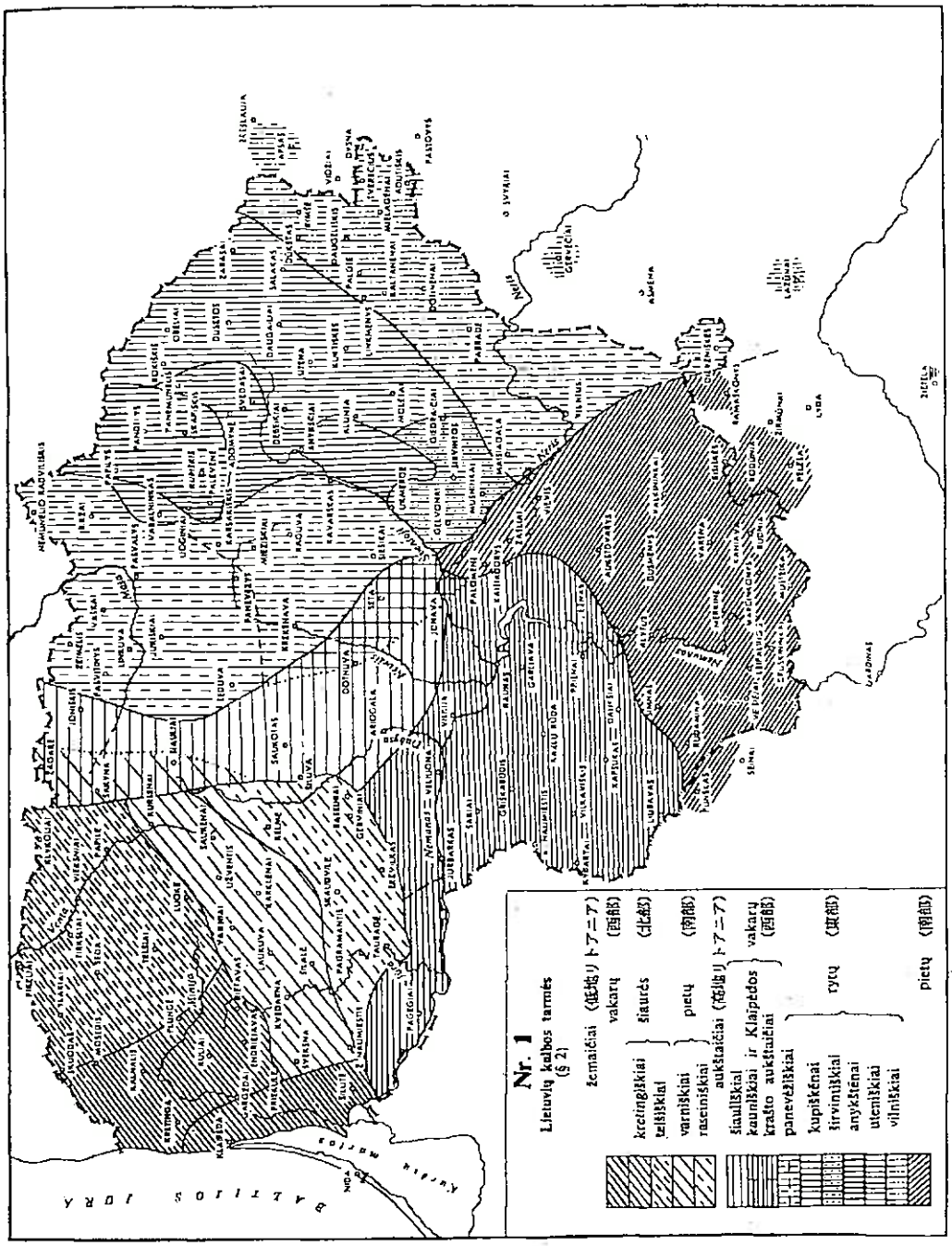
Лаучюте, Ю, А. 1979. "Акцентуационные особенности имен существительных в жемайтском диалекте литовского языка." *Исследования в области сравнительной акцентологии индо-европейских языков*. Ленинград.

Lietuvos TSR mokslų akademija lietuvių kalbos ir literatūros institutas.

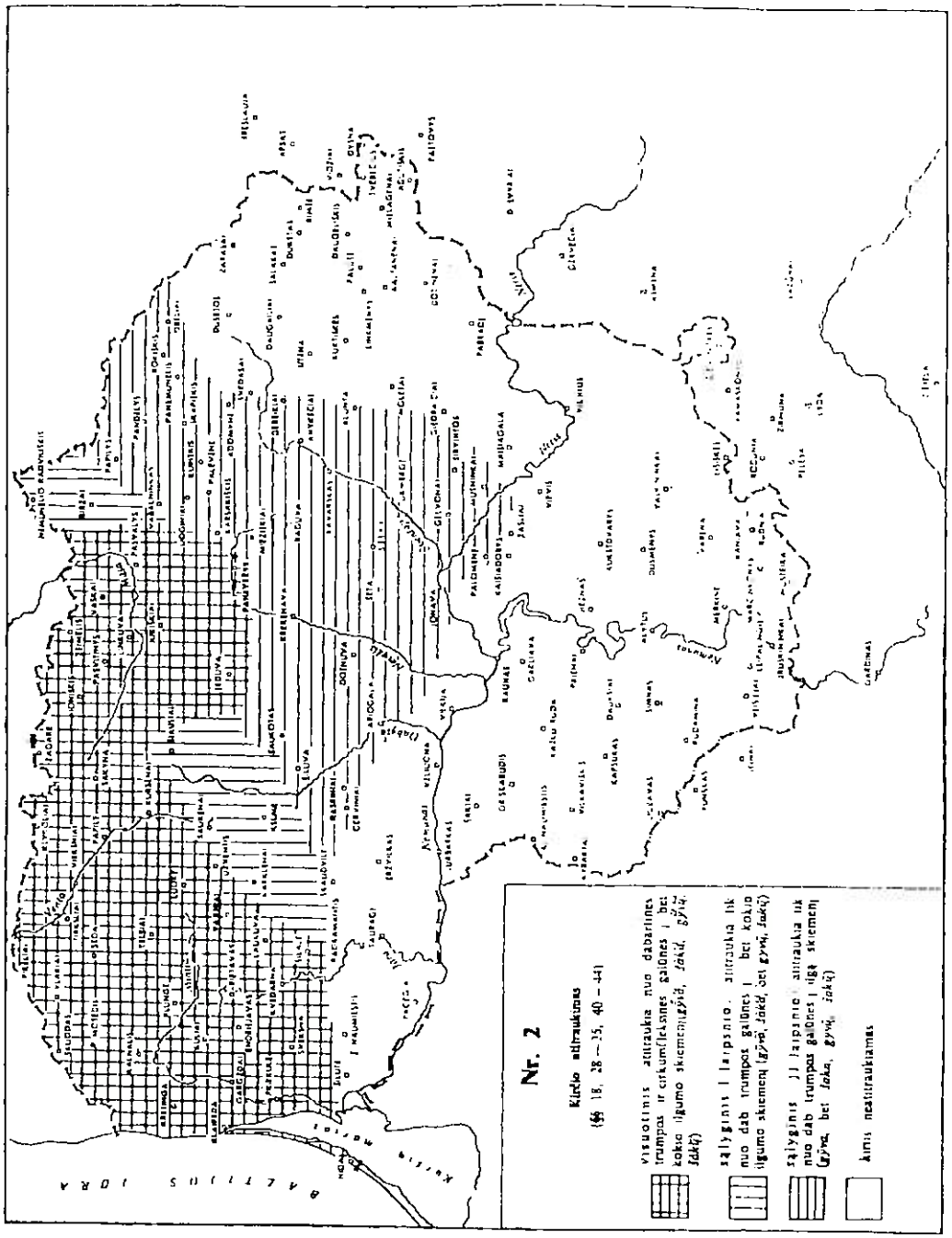
1965. *Lietuvių kalbos gramatika*, I, Vilnius.

1982. *Lietuvių kalbos atlasas*, II, Vilnius.

Mažiulis, V. 1970. *Baltų ir kitų indoeuropiečių kalbų santykiai (deklinacija)*. Vilnius.
Saussure, F.de 1894. "A propos de l'accentuation lituanienne", 490-512.
1896. "Accentuation lituanienne", 526-538.
Recueil des publications scientifiques. Genève (1922).
Senn, A. 1966. *Handbuch der litauischen Sprache*. I. Heidelberg.
Stang, Chr.S. 1966. *Vergleichende Grammatik der baltischen Sprachen*. Oslo-Bergen-Tromsö.
Zinkevičius, Z. 1966. *Lietuvių dialektologija*, Vilnius.
1980. *Lietuvių kalbos istorinė gramatika*. I, Vilnius.
1984. *Lietuvių kalbos istorija*. I, Vilnius.
矢野通生, 1984.「バルト・スラヴ語アクセント史研究序説(I)」, 名古屋大学文学部研究論集 LXXXVIII, 1-20.
1985a「リトアニア語アクセント論覚え書き」, 言語研究 第87号, 1-20.
1985b「バルト・スラヴ語アクセント史研究序説(II)」, 名古屋大学文学部研究論集 XCI, 5-36.
1987「バルト・スラヴ語アクセント史研究序説(III)」, 名古屋大学文学部研究論集 XCVII, 1-21.



Zinkevičius, Lietuvių dialektologija, 1966.


Nr. 2
Kirčio atitraukimas
(§§ 18, 28—35, 40—44)
visuotinis atitraukia nuo dabartinės trumpos ir cirkumfleksinės galūnės į bet kokio ilgumo skiemenį (gývi, lakù, gývi, lakù)
sąlyginis I laipsnio atitraukia tik nuo dab. trumpos galūnės į bet kokio ilgumo skiemenį (gývi, lakù, bet gývi, lakù)
sąlyginis II laipsnio atitraukia tik nuo dab. trumpos galūnės į ilgą skiemenį (gývi, bet lakù, gývi, lakù)
kirtis neatitraukiamas